

【報道関係各位】

2015年2月

〈ポーラ美術館 展覧会案内〉

# セザンヌ

近代絵画の父になるまで

2015年4月4日 [土]~9月27日 [日]



ポール・セザンヌ 《砂糖壺、梨とテーブルクロス》 1893-1894年 ポーラ美術館蔵

【報道に関するお問い合わせは】

ポーラ美術館 広報事務局 担当:後藤、小椋、三井 TEL 03-3575-9823 / FAX 03-3574-0316

 ポーラ美術館  
POLA MUSEUM OF ART

## 国内最大のセザンヌ・コレクションを一挙公開！

ポール・セザンヌ（1839-1906）は、ブラックやマチスははじめとする、20世紀の芸術家に多大なる影響を与えた画家として知られています。「セザンヌはわれわれ皆の父親のような存在でした」という言葉を残したのはピカソですが、この時代に新しい表現を生み出した芸術家たちは、独創性の高い芸術を生み出したセザンヌを、文字通り「父」とみなしていました。しかしながら、そのような存在に至るまでのセザンヌ自身の道のりは、決して平坦なものではありませんでした。

故郷エクス＝アン＝プロヴァンス（以下、エクスと略記）で画家としての一歩を踏み出したセザンヌは、パリに上京すると、最新の芸術の動向に対峙します。セザンヌは、1870年代には印象派の画家として活動しましたが、セザンヌの作品が公式に評価され始めたのは、驚くべきことにセザンヌが50代を迎えた、1890年代のことでした。当時、セザンヌは故郷である南仏に活動拠点を移していたため、評価の高まったパリの美術界では、伝説的な存在として語られるようになります。

「セザンヌー近代絵画の父になるまで」展では、ポーラ美術館が収蔵するセザンヌ作品9点を含む、およそ20点のセザンヌ作品に、印象派のモネやピサロからキュビズムのピカソまで、セザンヌにゆかりの深い画家たちの作品を加えたおよそ50点の作品を通じて、「近代絵画の父」になるまでに、セザンヌがいかに歩みを進めたのかを検証します。

- 開催期間 : 2015年4月4日（土）～ 9月27日（日）
- 作品点数 : 約50点
- 出品作家 : ポール・セザンヌ、ギュスターヴ・クールベ、エドゥアール・マネ、アドルフ・モンティセリ、カミーユ・ピサロ、クロード・モネ、アルフレッド・シスレー、ピエール・オーギュスト・ルノワール、ポール・ゴーガン、フィンセント・ファン・ゴッホ、オーギュスト・ロダン、アンリ・マチス、パブロ・ピカソ、ジョルジュ・ブラック等
- 会場 : ポーラ美術館（〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285）  
Tel. 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108
- 開館時間 : 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日 : 会期中無休
- 入館料 :

	個人	団体（15名以上）
大人	1,800円	1,500円
シニア割引（65歳以上）	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生	700円	500円

※料金はいずれも消費税込み。

※中・小学生の入場については、土曜日は無料です。

※中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生及び引率教員等の入場は無料です。

### 【関連イベント開催決定！】



山田五郎さんによる「アートトーク」を開催いたします！詳細は後日HPにて発表します！

講師：山田五郎（編集者・評論家）

日時：4月18日（土）14:00～15:00

場所：ポーラ美術館・講堂

## 本展の見どころ

### 1. セザンヌの生涯をたどることのできる奇跡のコレクション、徹底解剖。

#### 日本最多のセザンヌ・コレクション9点を一挙公開！

ポーラ美術館の収蔵するセザンヌ・コレクションは、20歳頃のセザンヌの最初期の作品から、円熟期の傑作とうたわれるものまで、セザンヌの画業の重要な時代を網羅する奇跡のコレクションです。「人物画」「静物画」「水浴図」「風景画」というセザンヌを語る上では欠かせない4つのジャンルの優品が体系的に収集されています。

本展では、セザンヌが「近代絵画の父」になるまでの道程を明らかにするために、当館のセザンヌ・コレクション9点を道標とし、セザンヌが見出した独創性の高い表現の数々を詳細にとどります。またセザンヌの静物画を徹底解剖し、多視点を導入した構図の秘密を解き明かす動画コーナーを設置し、セザンヌの絵画空間を体感いただけます。



ポール・セザンヌ  
《アールカン》  
1888-1890年



ポール・セザンヌ  
《砂糖壺、梨とテーブルクロス》  
1893-1894年



ポール・セザンヌ  
《4人の水浴の女たち》  
1877-1878年



ポール・セザンヌ  
《プロヴァンスの風景》  
1879-1882年

\*すべてポーラ美術館蔵

### 2. 名作が勢ぞろい。国内のセザンヌ作品が一堂に会します。

本展では、当館のコレクション9点に加え、国内に所蔵されている重要作品をあわせた約20点のセザンヌ作品が登場します。日本人に長らく愛好され、国内各地の近代絵画コレクションを代表する屈指の名品が、一堂に会する貴重な機会となるでしょう。

昨年、東京国立近代美術館の新収蔵品として初めて公開されたばかりの《大きな花束》は、セザンヌの静物画では大変稀少である幅1メートルの堂々たる大作です。本展の開催にあたり特別に期間限定でご出品いただけることになりました。その大画面にあふれるセザンヌの瑞々しい筆触と色彩をご堪能ください。



ポール・セザンヌ《大きな花束》1892-1895年 東京国立近代美術館蔵  
出品期間:4月4日(土)~6月7日(日)

### 3. セザンヌが「近代絵画の父」になるまで。

#### マネ、ピサロ、マティス、ピカソらの作品と「セザンヌ伝説」をひもときます。

セザンヌが「近代絵画の父」と呼ばれるに至った背景には、セザンヌの芸術を礼讃し、発展に導いた芸術家たちとのさまざまな交流がありました。画家を志した初期に、絵画の描法と主題において強烈な影響を与えた前世代のクールベとマネ。セザンヌを戸外での自然観察と制作に導いた年長の師ピサロ。友人であったルノワール、モネ。そしてセザンヌ芸術から出発して絵画空間に革命をもたらした次世代の画家、マティスやピカソ。これらの画家たちの作品とセザンヌの作品を共に展覧し、「近代絵画の父」を取り巻くさまざまな伝説の真相に迫ります。

## 各章の概要

### 【第1章】画家への挑戦: 前衛の先駆者たち

本章では、パリに上京し、画家としての第一歩を踏み出すべく模索を繰り返したセザンヌの姿をご紹介します。

1861年、セザンヌは画家を志してパリへ向かい、当時の新しい美術の動向を次々と吸収します。その際に大きな目標となったのは、クールベ、そしてマネの存在でした。クールベからは、パレット・ナイフを使用した厚塗りの技法を、マネからは、色彩を対比しながら平坦に絵画を描く方法を学びました。これらの表現は、無骨で荒々しい印象を与えるもので、初期のセザンヌ作品の特徴でもあります。



ポール・セザンヌ  
《アントニー・ヴァラブレグの肖像》  
1874-1875年頃 ポーラ美術館蔵

### 【第2章】オワーズ川のほとりで: 印象派の中のセザンヌ

印象派の画家たちと共に活動したセザンヌは、ピサロから印象派の革新的な技法を学びます。フランス北部のオワーズ川のほとりで、画架を並べて共同制作を繰り返した二人は影響を受け合いました。

本章では、ピサロを中心に、共同制作を行ったルノワールをはじめとする印象派の仲間たちの作品と、セザンヌの戸外制作による風景画や、生涯を通して取り組んだ水浴図をご紹介します。



ポール・セザンヌ  
《オーヴェール=シュール=オワーズの藁葺きの家》  
1872-1873年 ポーラ美術館蔵

### 【第3章】印象派を超えて: 独創性をめぐる冒険

セザンヌは次第に印象派から距離をとり、プロヴァンス地方へと活動の拠点を移します。これは、印象派とは異なる、天性の構成感覚を生かした表現を追求するためでした。「構成感覚」とは、描くもののかたちや色彩、配置によって全体のバランスを図り、緊張やリズムをともなった感覚のことです。

本章では、風景画や静物画をご紹介しますながら、独創性を大きく花開かせたセザンヌの歩みを辿るとともに、セザンヌの表現にいち早く関心を示したゴーガン、ファン・ゴッホといった同時代の芸術家たちの作品をご紹介します。



ポール・セザンヌ  
《曲った木》  
1888-1890年 ひろしま美術館蔵

### 【第4章】見出されたセザンヌ: 南仏にやってきたパリ

「近代絵画の父」という今日におけるセザンヌの評価の原点が、1895年に開催されたセザンヌの大きな初の個展です。第3回印象派展以来、セザンヌの作品は公にはほとんど発表されておらず、この個展は長年のセザンヌの画業の全貌を初めて紹介する機会でした。この個展を目にしたピサロ、モネといった芸術家の仲間たち、そして画商や美術批評家は、驚嘆の声をあげます。

本章では、セザンヌの個展への出品作の一部をご紹介しますとともに、この時期に急速に高まったセザンヌ芸術の評価を辿ります。



ポール・セザンヌ  
《縞模様の服を着たセザンヌ夫人》  
1883-1885年 横浜美術館蔵

### 【第5章】セザンヌ・レジェンド: 後世への遺産

本章では、セザンヌが、マティス、ブラック、ピカソなど20世紀の画家たちに与えた影響をみていきます。セザンヌの影響があるとされる最も有名な美術運動が、ピカソやブラックによるキュビズムです。また自由な色彩の表現にたどり着いたマティスも、セザンヌの信奉者でした。

当館収蔵の《アルルカン》は、世界に4点しかない「アルルカン」を描いた貴重な油彩画であると共に関、後世への影響を見る上で重要な作品です。このアルルカンを中心に、マティス、ピカソ、ブラックらの作品をご紹介します。



ポール・セザンヌ  
《アルルカン》  
1888-1890年 ポーラ美術館蔵

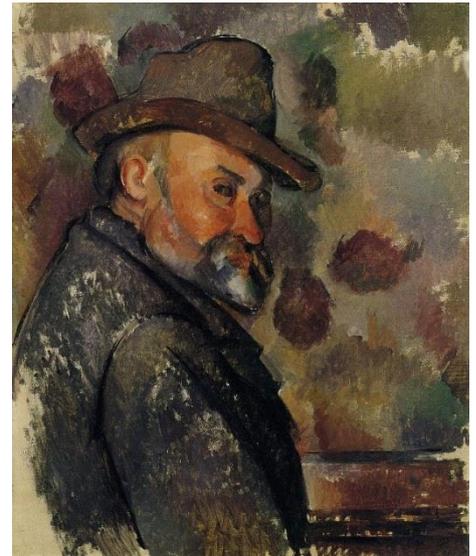
# ポール・セザンヌとは？

## ポール・セザンヌ (1839-1906)

- 1839年** 南フランスのエクス=アン=プロヴァンスに生まれる。銀行家の父のもと、裕福な家庭に育つ。
- 1852年** ブルボン中学に入学。後に小説家として大成するエミール・ゾラと深い友情を結ぶ。
- 1861年** 22歳で画家を志し、パリに上京。ピサロを通して、モネ、ルノワール等、印象派の画家たちと交流。絵画の古典的な規範に反発し、クールベやマネを目標とする。
- 1869年** 30歳のとき、モデルの仕事をしていた19歳のオルタンス・フィケと出会い、同棲をはじめめる。
- 1872年** 息子ポールが生まれる。父親からの仕送りで生活していたセザンヌは、仕送りが途切れることを恐れ、オルタンスと息子の存在を秘密にする。ポントワーズでピサロと制作。
- 1874年** 第1回印象派展に参加。
- 1877年** 第3回印象派展に参加。その後、印象派から距離をとり、パリを離れて故郷で独自の表現を追究する。
- 1895年** パリのヴォラール画廊でセザンヌ初の個展開催。印象派の画家たちや批評家から高い評価を受け、名声を築き始める。
- 1902年** エクス郊外のレ・ローヴにアトリエを新築。
- 1904年** サロン・ドートンヌで個展を開催。
- 1906年** 戸外で制作中に体調を崩す。エクスにて10月23日に永眠。



エミール・ベルナール撮影「レ・ローヴのアトリエに座るセザンヌ」1904年  
© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / René-Gabriel Ojéda / distributed by AMF



ポール・セザンヌ  
《帽子をかぶった自画像》  
1890-1894年頃 石橋財団ブリヂストン美術館蔵  
出品期間:5月30日(土)~9月27日(日)

### ● 「りんごは動かない！」—頑固だったセザンヌ

自らの絵画の表現に真摯に取り組み続けたセザンヌには、多くの逸話が残されています。そのひとつが、生涯にわたり、肖像画のモデルを務めた妻オルタンスに対して、「りんごは動かない！」と言い放った、というものです。若い頃にモデルとして働いていたオルタンスは、忍耐強くポーズをとることに長けていましたが、セザンヌはモデルが動くことを極端に嫌っていたために、静物画に登場するりんごのようにモデルを務めることをオルタンスに強いました。セザンヌの個展を開催した画廊ヴォラールは、自らの肖像をセザンヌに描いてもらった際に、115回ほどポーズを取らされたと言っています。真摯に自らの表現に取り組むあまり、モデルを困らせたことも多かったようです。



ポール・セザンヌ  
《縞模様の服を着たセザンヌ夫人》  
1883-1885年 横浜美術館蔵

## セザンヌと交流のあった画家たち

### ● セザンヌとピサロ—近代絵画の「父」とその「師」

「セザンヌの魅力を感じないものは、ある感性が自分に欠けていることを示すことになるのだ」

—カミーユ・ピサロ

セザンヌは、印象派の技法をピサロから学びました。セザンヌは、ピサロの模写を通して多くを学んだようです。ピサロの息子であるリュシアンは、「1870年代にセザンヌは、おそらくどのように描かれているのかということを知りたいために、父の絵画の中のひとつを借りて模写を行いました・・・」と回想を残しています。セザンヌを印象派に導いたピサロは、セザンヌの「師」であり、欠くことのできない友人でもありました。



ポール・セザンヌ  
《ポントワーズの橋と堰》  
1881年 国立西洋美術館蔵



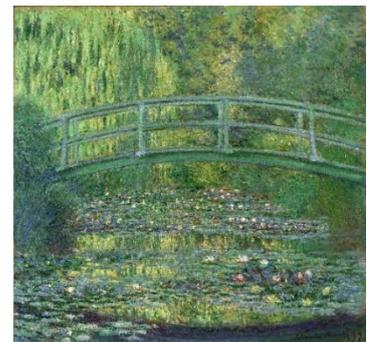
カミーユ・ピサロ  
《エヌルー街道の眺め》  
1879年 ポーラ美術館蔵

### ● セザンヌとモネ—ライヴァルたちとの「絆」

「セザンヌは私たちのなかでもっとも偉大である」

—クロード・モネ

1890年代、セザンヌとモネは互いに画業の円熟を迎えていました。パリの画廊で次々と新作を発表して名声を築きあげていたモネとは対照的に、セザンヌはほとんど無名の状態でした。そのため、モネは、セザンヌを励まそうと、美術界の知人たちに引き合わせる会合を自邸で開きます。そこには、美術批評家のギュスターヴ・ジェフロワ、そしてオーギュスト・ロダン等が招かれました。この会合は、ヴォアラール画廊でセザンヌの個展が開催される直前にあたり、その後のセザンヌに対する評価の基盤となったといえるでしょう。



クロード・モネ  
《睡蓮の池》  
1899年 ポーラ美術館蔵

### ● セザンヌとピカソ—「父」と20世紀の「天才」

「彼は私たち皆の父親のようなものでした。私たちを守ってくれたのは、セザンヌだったのです」

—パブロ・ピカソ

《裸婦》は、モデルの身体や背景の山を、ひし形や山形の小さな色面に分解し再構築した、キュビズム時代のピカソの傑作のひとつです。ピカソがこうした斬新な表現に取り組むきっかけとなったのが、セザンヌの芸術との出会いでした。1900年にパリを初めて訪れたピカソは、セザンヌの画商でもあったヴォアラールを通じて、セザンヌの作品の数々に触れます。とりわけセザンヌの没する1906年から1908年にかけては、セザンヌからの影響を色濃くとどめた作品を数多く残しています。

後年になって、ピカソはセザンヌ作品のコレクションを始めます。ピカソはセザンヌに実際に会うことはありませんでしたが、その作品を通して尊敬を深めたセザンヌの存在は、生涯にわたって自らの創作を庇護し続けました。



ポール・セザンヌ  
《アルルカン》1888-1890年  
ポーラ美術館蔵



パブロ・ピカソ  
《裸婦》1909年  
ポーラ美術館蔵  
© 2015 Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

## セザンヌ作品をもっとよく見るためのキーワード

### ● 謎をうむ複数の視点

《ラム酒の瓶のある静物》 1890年頃 ポーラ美術館蔵



セザンヌにとって物言わぬ静物は、構図や視点についての探究を、時間をかけて進めていくことのできる格好の主題でした。

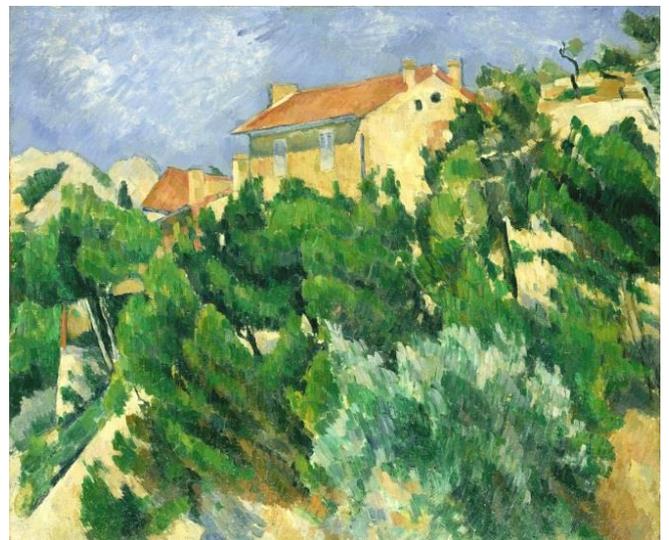
《ラム酒の瓶のある静物》は、一見、机の上にモチーフが無造作に置かれているようですが、丸い果物の形のリズムと色彩のバランスが慎重に計算されています。また、複数の視点から描いたモチーフが組み合わせられていることも特徴です。机には、上から見たような奥行きや斜めから見た歪みがありますが、口の部分が背景に溶け込むように塗り残された瓶は、ほぼ水平からとらえられています。

この手法は、対象の形態を分析的にとらえて再構築するキュビズムの運動に大きな影響を及ぼしました。この作品は、ドガと親交のあったアメリカ人女性画家メアリー・カサットの旧蔵作品です。

### ● 世界を創る構築的筆触

《プロヴァンスの風景》 1879-1882年 ポーラ美術館蔵

セザンヌは、自然豊かな故郷プロヴァンスの風景を主題に、かたちのデッサンと色彩の探究を続けました。《プロヴァンスの風景》では、陽光に照らされた山の斜面の風景が見上げる視点によって描かれています。青い空、赤い屋根とクリーム色の壁の家、そして斜面を覆う緑の木々が、鮮やかな色彩で描かれており、南仏の明るい太陽を想起させます。この木々は、斜め方向の細長い筆触によってとらえられ、それらが連なることによってその立体感と量感、それを取り囲む空間を感じさせる色の面が生み出されています。セザンヌは、自らが見た世界を、筆触による色の面に置き換え、世界を創り上げたのです。この作品は、印象派絵画を評価した第一世代のドイツ人コレクター、ハリー・ケスラー伯爵の旧蔵作品です。





## ● 考え抜かれた画面構成

《4人の水浴の女たち》1877-1878年 ポーラ美術館蔵

セザンヌは、さまざまな技法や画材で水浴図を200点以上も制作しています。「水浴」は西洋では長い伝統があり、神話の女神やニンフを裸婦として風景のなかに描き出す主題でしたが、セザンヌはこの主題を通じて、人物群像の構成と、風景と人物の調和の探究を続けました。画面では、中央の女性を頂点とし、残りの3人は安定感のある三角形を成すように、浴女たちの姿が熟慮されたポーズと配置で描かれています。また、画面左右の端の木々も、浴女たちが形作る三角形を強調しています。このような水浴図は、マティス、ピカソ、彫刻家のムーア等の制作に影響を与えました。

## ● 空間に収まらない人物の動き

《アルルカン》1888-1890年 ポーラ美術館蔵

セザンヌは1880年代から1890年代にかけて、「アルルカン」をはじめいくつかの人物画の連作を制作しています。ポーラ美術館の《アルルカン》は、プーシキン美術館の《マルディ・グラ》(1888年)をはじめとする4点の連作の1点です。「アルルカン」とは、16世紀のイタリアからフランスに伝わった即興喜劇コメディ・ア・デラルテの登場人物で、セザンヌの息子ポールが衣裳を着てモデルを務めました。

この連作でセザンヌが探究したのは、空間における人体の形と動きの表現でした。アルルカンは、一歩前に踏み出したポーズで描かれていますが、頭部と足先を画面に収めないことで、人体の前進する動きをより強調しています。

